
己の証は誰かの証

零野凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

己の証は誰かの証

【Nコード】

N8282T

【作者名】

澁野凌

【あらすじ】

極卒君がポップンパーティーに呼ばれる前、彼はそれ以前に何をしていたのか。

極卒君と2P鬼・BEを中心にMZDに招待される前と、何故極卒という名前になったのかを書いています。

自分なりの名前解釈と、擬人化、カップリング要素（極卒君×2P鬼・BE）あります。ここでの2P鬼・BEは女子です。

地獄描写もありますが濃くはありません。自己設定注意。

サイトで書いたものを書き直し、転載。

僕は何処にいるんだ

立っているのか、寝ているのか。周りは全て闇の色。音も触覚も、感覚が無い。ああ、そうか。確か、最も激しい戦地を視察しに向かったら 敵とも味方とも分からない銃弾を浴びて死んだ。一発目が急所であと何箇所にも。

やれやれ、呆気なかつたな。戦争に身を投じ、それを楽しんだ者の末路としては上出来か。戦争の結末などいいものでは無いのが世の条理。それでも一度は殺戮と言うものを興じたいとは思っていた。自嘲した所で、遠くの方が赤黒く変わった。奥から絶叫。燃える火の音。やっと此処が何処か見当が付いた。

「地獄……」

『そうだ』

「誰だ？ 悪魔か、閻魔か」

『どう呼んでくれても構わない』

周りがある闇に向かって呼びかける。姿形は見えない、ただ暗い暗い闇。ならそれでいい。そのまま続けた。

「地獄も戦場と変わらないな」

『そう地上で仕向けたのはお前だ、その所業は地獄でも扱いきれない』

「それで？ 地獄行きの人生だと言うのは前から知っている。今更嘆く事も請うこともしない。火炙りか？ 針山か？ 血の池地獄か？ 地上も此処も変わらない」

『そうだな……お前を地獄の鬼として迎え入れる』

返ってきたのは意外な言葉だった。

「生きていた頃の所業を悔やまないかも知れないぞ」

『お前は自分のした行いに呆れ、見下した。それは無益な行いと決別したからだろう』

呆れに近い感情だったが、違う。まだなりきれなかったただけだ、非道な独裁者には。だが全てを否定するのも違うと感じたので、曖昧な返事をした。

「……ああ、それでもいい。此処にいるのも」

『受け入れるならお前は輪廻から外れ、一人この地獄で延々と亡者の魂が罪を責め続けなければならぬ』

つまり、人世に戻ることなく永遠に地獄にい続けるのか。

「それもいいな、地上のくだらない事より楽しめるだろう？」

『決定だ』

その途端、闇が僕を包んだ。悪くはない。

『ならば、地獄の鬼に名などいらぬ』

暗黒に包まれ、その声だけが頭の中に響いていた。

そして、気付けば地獄の鬼の一人として亡者の魂を業火で焼いていた。彼等は燃える、苦しみの声を上げながら。どこまでもくすぶ

る、懺悔を叫びながら。

僕もあの中にいたのかもしれない。それでも今は今だ。貴様らは全ての罪を罰せられ、悔やみ、次の新しい人生を新しく始められる。僕は生きた頃の記憶を刻んだまま、此処で永遠に生まれ変わることなく働き続ける。

今となつてはどちらが楽なのだろう。

この仕事に休みは無かった。人は簡単にいくらでも死ぬ。休みは無いが、いくら暇な時はある。亡者が言葉と言つよりも叫びだけを口から吐き出し始める時。その時彼等に意識はない、身体の悲鳴を口から垂れ流すだけ。

指名されてから暫く経ち、その様子を眺めていた時だった。

「あら、あんた獄卒さん？」

地獄に似合わない軽やかな女の声。見ると少し離れた所に女が立っていた。殺伐とした場所に笑顔で立っている。変わった女、最初はそう思った。

「そんな名前じゃないな。僕は……」

言いかけて口籠った。自分の名前が思い出せない。そもそも名などあったのか？

僕の様子に女はくすくす笑った。

「誰も名前なんて訊いてないわ、地獄に来た人は有無を言わず自分の名を消されるの。だから皆、現世との繋がりを断ち切られてる」

長い淡い水色の髪は毛先に行くにつれ白くなっていて、服は和服とも洋服とも言えない。かろうじて和服寄りか。頭には鬼の面。耳

を塞いでも滑らかに入り込んでくる声は、心地良い様な妖しい響き。瞳が嫌に気味悪く澄んでいて 人間ではない気がした。そもそも僕以外に此処に自我を持っている者などいなかった。

僕の考えを知ってか知らずか女は話しながら近付いてきた。女の説明によれば、地獄で亡者を責める鬼を“獄卒ごくそつ”と呼ぶらしい。だからこの女はそう呼んだのか。

「ね、あんた新入りさん？」

「鬼に新入りなどいるのか」

「たまにこの役も変わるのよ。でも前の人に変わってまだ50年も経ってないから…あんた、よっぽどの人だったのね」

「そんな僕と話し、平気で地獄にいる。責様も鬼だらうな」

余りにも楽しそうな相手に少し腹が立ち、強い声で意見を発する。女は一瞬目を見開いて笑った。喩えれば、ぞつとする様な心からの笑顔。

「当たり前、私も鬼。だけど此処の鬼じゃない、私は狭間で生まれた。だから此処の鬼とは違うのよ」

僕の隣へと歩み、目の前の業火にふつと息を吹きかけた。息が炎に触れた瞬間それは勢いを増し、亡者の叫び声は酷くなった。

それを満足そうに見つめる女の目も、笑顔も冷たい。見下すと言うよりもただただ憐れんでいる。

「じゃあね、また来るわ」

くすりと笑うと女は業火に手を伸ばし、指先からそのまま炎に溶けていった。その場に残ったのは啞然とする僕と、勢いの劣らない炎に歪む亡者のうめき。

元から鬼らしい女。その力は吐息を炎に返すほど。だが恐怖という感情を抱くことはなかった。僕に向かつて笑いかけるなんて変わり者だな。その印象が強かった。

また暫くしてその女はやって来た。この時は業火を見る僕の側で石を片手に地面に字を書いていた。

「あんたのこと、極卒君って呼んでいい？ “獄卒” だから “極卒”」

こんな字を書くのよ。

女は指差した。土の上にはひつかいた様な字で “獄卒 極卒” と書かれていた。そうか、鬼だから漢字は書けるのか。妙なところで感心をした。

「勝手にすればいい、だが何故 “君” 付けだ？」

「これでもあんたよりは長ーく鬼だからね。私のほうが年上でしょ？ 極卒君。遅くなっただけど私は狐きつね-BE」

女、狐 - BEはざっと手で字を消し、掌の土を払って立ち上がると早速勝手に付けた名前を呼んだ。嫌な感覚もなく、耳に滑り込んできた。

元の名よりもこっちの方がしっくり来るからか。前など覚えてもないのに。

狐 - BEはそれからよく現れた。話す会話は他愛ない世間話に近かったが、それでも話し相手がいる生活は心を保たせた。亡者を燃やし続けるだけ生活は、僕に思考など与えてくれなかっただろうか。

そしてある時、狐 - BEは僕に問い掛けた。

「極卒君は神様を信じる？」

「くだらない質問だな」

「私は知ってる。あんたの生きた世界ではないけどね。極卒君もきつと招待されるわよ、神様に。ポップンパーティーに呼ばれる」

「それはその時が来たらの話だろう」

「私達がそうだったから、来るわよ」

何故か自信たっぷりに饒舌に話していく。その様子が前の自分と微かに被る。自分の名は忘れても、過去の所業だけは頭にいつまでもこびり付いていた。嫌悪が過ぎり、はっきりと言いつつ放った。

「くだらないな、神などいるわけがない。人が指導者として人民を先導した時、そいつは神となる。全てのものを支配し食い付くし破壊へと導く独裁者という名の支配者だ」

「それって…前のあんたみたいに？」

ぼつりと呟き、僕を見るその目には慈悲に似た光が宿っていた。前に見せた業火に焼かれる亡者に向けるものと似た様な。

「あんな世界だからきつと、あんな目もしたのかしら…」

「何が言いた…」

僕の後ろに歩いて行ったはずの狐・BEは、もういなかった。

あやつは前の僕を知っている…？ 相手は鬼だ。知らない事は無いのだろうな。きつとどこかで見たのだろう。気付ける筈も無い、相手が相手だ。

次に会う時に訊けばいいだけの話だ。

「貴様は……生きていた頃の僕を知っているな？」

また現れた狐 - B E に向かつて、僕は淡々と告げた。狐 - B E は驚く素振りも無く、当たり前のように言葉を返す。

「ええ。革の椅子に座り、手足の様に人を操る極卒君をずっと見ていたわ」

「何故僕に近付くんだ、愚かな指導者を嘲笑い続けるためか？ 悪趣味な」

「最初はね。人間は愚かで憐れ、軍の頂点にいたあんたも同じ様に思ってた。けど、あんたは時々哀しい目をしていたから」

嗚呼、こいつは僕の本心を僕の知らないところで見抜いていたと言うのか。

「本当は戦争なんてしたくなかったんじゃないかって。あんたは人の為にと良い方へ進みたかった、善心を鬼で隠した指導者なのよ。皮肉なものね」

「違う、僕は傲慢で愚かで憐れな独裁者だ。僕もこの火で焼かれればよかったのさ、戦火の様な業火に」

そう自分で言いながら有り得ないことは分かっている。

じつくりと罪の意識で心身をいたぶられ、思考を無くし、ただ業火に亡者と自分を縛り続ける。それが獄卒の宿命だといつの間にか悟った。

「これが鬼と言われた独裁者の末路だ」

「ねえ、今のあんたは本当に鬼なの？ 鬼として無理に生きようと

した哀しい人間じゃないの？」

「ならば、貴様は人間に恋焦がれる出来損ないだ」

「私は人にそんなこと思わない。想うとしても、あんたの事だけよ」

一瞬のうちに詰め寄せられ、喉元に爪を突き立てられる。鋭くとがった爪が徐々に皮膚に食い込んだ。

「ここまで一人の人間に執着したことなんて無かったのよ？ 極卒君の目を追って、そのワケを知ったとしても知りたくて。自然を装って近付いた。そう私は鬼、あんたの全てが欲しい欲深い鬼。手に入らないなら無に帰してあげる、二度と逢わない様に……」

狐 - BE の声は怒りよりも悲しみを帯びていて、僕には返す言葉もなかった。肉を掻き切ろうと震える手が、よく心情を表している。

戦火を燃やしたが鬼になりきれなかった現世の自分。鬼であるが故、初めて誰かを想う気持が重い狐 - BE。

今も昔も鬼と言えない二人。

「……………我々は変わり者、なりきれない者が惹かれあつた」

呆れた様に呟けば、彼女の手がゆっくりと退いた。

「やっぱり言葉で翻弄するの、得意なのね……？」

「貴様に比べたらまだまださ」

頬に手を伸ばし、相手の感覚を確かめ合う。地獄で確かめる体温ほど似合わないものはない。それでも求めてしまうのは、何かの隙間を埋める為なのだろうか。

それ以来、狐・BEの姿を見掛ける事は無かった。気紛れなあやつの事だ。きつとまた違う場所にふらふらと現れては、誰かをからかっているのだろう。

寂しいと言う感情は当て嵌まらない。言うなれば、『静か』。亡者の呻きと叫びが訝すこの世界で静かだと思えるのは、やはりあやつを想っているに他ならないのか。

炎を見つめ直そうとすると景色がぐにやりと歪んだ。体自体が、どこかに飛ばされる。殺風景の岩と炎の地獄から、目の前に広がるのは広い誰かの部屋。

「地獄に行くのは気が引けるから、呼び出させて貰ったぜ」

ソファーに座り、サングラスをかけた少年が口の端を上げて笑った。なにやら偉そうな態度はこの次の言葉で納得した。

「俺はM Z D、神様つつたら分かりやすいだろ？ま、信じられねえだろーが」

「地獄にいた身だ、不可思議には慣れた。宴の誘い、か……」

「お、知ってんのか」

「少しだけだが、知り合いから聞い……聞かされた」

そのM Z Dと言うポップンの神から伸びた影が、僕に何かのチケットを手渡してきた。派手な色で装飾されている。

「なら早え。招待するぜ、14回目のパーティーに。地獄の鬼からポップン界の住人になるのも悪くねえだろ？」

『きつと呼ばれるわよ』

その言葉が脳裏を過ぎった。ああ、その通りか。

「そついや名前なかったんだよな、新しく付けるか？」

「……いや、地獄で知り合った奴に呼ばれていた名でいい」

狐・BEが勝手に呼んだ名が、僕の名前。

あやつは知っていて付けたのだ。極めた道が修羅だとしても、振り返ることなく見つめた鬼の横顔を。僕は名乗る。それがあやつがいた証であり自分の道の証ならば、地獄であろうと何処であろうと構わない。

それ以外は似つかわしくない。僕は鬼、ならば此処でも鬼となろう。

「地獄の鬼の名を取って、極卒と呼べばいい」

(後書き)

もともと獄卒という鬼の名前があつて、それが極卒に変化したのならどんな経緯があつたのだろうかと妄想した結果です。

2P 鬼・BE (以下・狐・BE) が女の子なのかは、自己設定で1P が男の子だから。姉弟設定で組んであります。

本物の鬼と、鬼と化した人間。そんな二人だから、受け入れられるでも、お互い自己嫌悪と愛憎入り混じつた、愛していても殺しあえる殺伐とした雰囲気を書けていたら、さいわいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8282t/>

己の証は誰かの証

2011年10月9日04時29分発行